

一部のDMI剤で薬剤感受性が低下したナシ黒星病菌の発生

ナシ苗木による生物検定で、一部のDMI剤に対する感受性低下菌の発生が県内のナシ園からも確認された。

農業研究センター果樹研究所病虫化学研究室 (担当者: 吉田麻里子)

研究のねらい

ナシ黒星病の防除では、産地では年に十数回の薬剤防除を実施しているにもかかわらず、一部産地では連年多発している園地もみられる。他県ではナシ黒星病に使用されるDMI剤の一部で感受性の低下した菌の発生が報告されている。

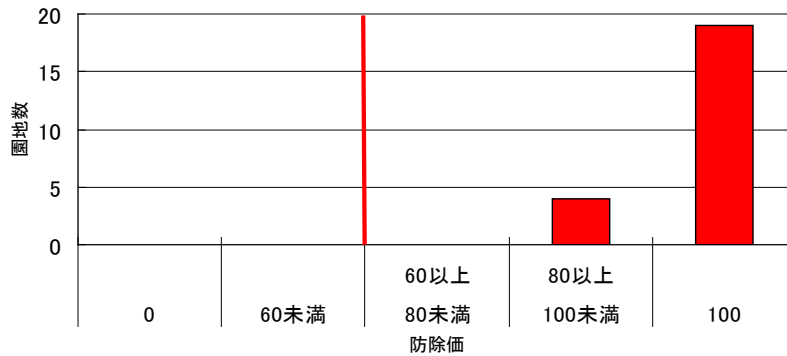
そこで、県内においてもナシ黒星病菌の感受性低下が懸念されたため、県内ナシ産地のナシ黒星病菌のDMI剤に対する感受性検定を実施し、その実態を把握する。

研究の成果

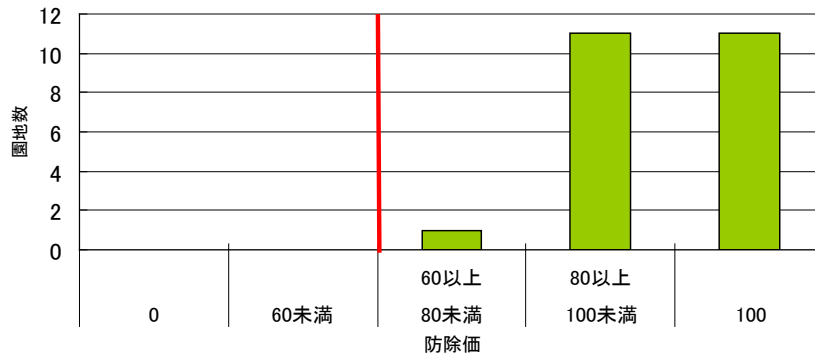
1. 2008～2010年の3ヶ年間で県下のナシ産地5地域15園地(延べ23園地)のナシ黒星病菌を採取し、生物検定した結果、各薬剤の防除価はジフェノコナゾール水和剤4,000倍が95.4～100、ヘキサコナゾール水和剤2,000倍が78.1～100、フェナリモル水和剤4,000倍が0～100であった。また、イミベンコナゾール水和剤4,000倍については2010年に3園地で実施し、防除価は40.4～100であった(図1)。
2. 防除価60未満の薬剤については黒星病に対する防除効果が低下していると考えられ、フェナリモル水和剤4,000倍は各産地で防除効果が低下しており、イミベンコナゾール水和剤4,000倍は一部の園で防除効果の低下が認められたことから、これらのDMI剤に対する感受性低下菌が発生していることを確認した。

普及上の留意点

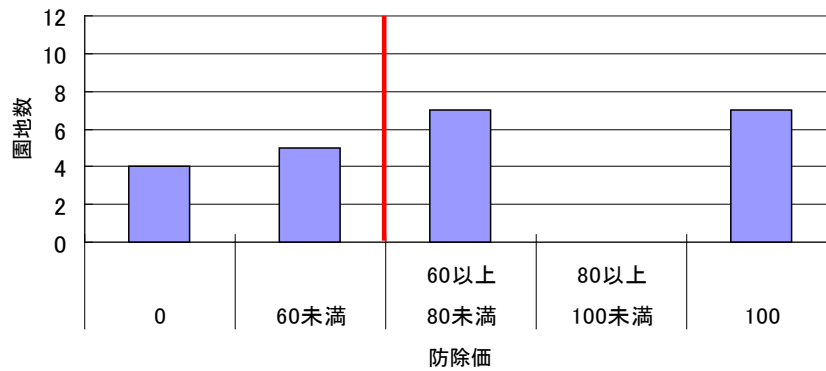
1. DMI剤の使用については、多用による薬剤感受性低下を避けるため、年間の使用回数は3回以内とし連用を避けて、殺菌の作用の異なる保護殺菌剤と組み合わせて、体系防除を行う。
2. 発病葉や発病果実のせん除、落葉処理等の耕種的防除を行い、感染拡大を抑え、発病を抑制する。



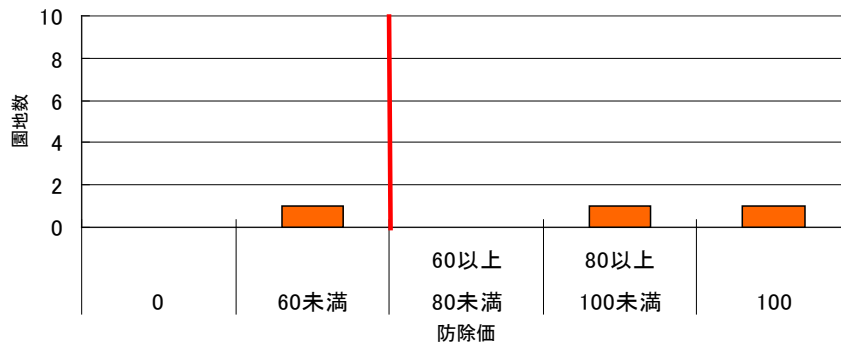
ジフェノコナゾール水和剤 4,000 倍



ヘキサコナゾール水和剤 2,000 倍



フェナリモル水和剤 4,000 倍



イミベンコナゾール水和剤 4,000 倍

図1 ナシ黒星病菌に対する各DMI剤の防除効果(ナシ苗木による生物検定) (2008~2010)